

BCAO 関西支部 第 53 回地域勉強会議事録

1. 概要

- (1) 日時：2011年4月20日（水）18：30～20：30
- (2) 場所：住友電気工業株式会社
- (3) 座長：角支部長
- (4) 書記：川口
- (5) 出席者：18名（順不同、敬称略）
日下、萩原、福島、柳父、伊藤、大館、西濱、野原、紅谷、荒二井、小友、鶴谷、鷺山、川村一郎、鳥淵、山野、川口、角
- (6) 議題：東日本大震災に関する情報交換

2. 議事録

- 座長：
- 地震動の周期1～2秒の加速度が約3000ガルと速すぎたために、建物の倒壊が少なかった。
 - 津波が構造物に与える津波波圧は、波の高さの3倍相当の静水圧がかかることが、実験で確認されている。
 - これまでの建築物は、津波対策をあまり考慮していなかったが、今後の建築の課題になると考える。
- A氏：
- 被災地の出身でもあり、顧客のITBCP業務と関連して、いち早く現地入りした。自社では、発災3分後に対策本部を立ち上げた。3県(福島、宮城、岩手)に対して、緊急車両証明の申請を直ぐに行ったが、3県分全ての証明を入手するのに丸1日を要した。真水で浸水したサーバの復旧は、ドライヤーで乾燥させることで可能な場合があるが、塩水の場合は、ショート恐れもあり、ほとんど、うまく行かない。
 - バックアップ電源がガス式発電機である場合、ガスの供給停止で役立っていなかった。油燃料式の発電機の場合でも、油燃料の緊急時優先納入契約をしていなかったために、燃料を入手できず、稼働できていない状況。トリプルAクラスのデータセンターでさえも、燃料の備蓄量は3週間程度までである。
 - これまで自サイトからバックアップ拠点の立地は60km以上離せばよい、とされてきたが、今回の震源域は500kmであることより見直しが迫られている。例として、沖縄にバックアップ拠点を設置した場合、CE(カスタマーエンジニア)、SE(システムエンジニア)、システム管理者らのバックアップサイトへの移動の利便性が極端に悪くなり、実現しがたい。
 - 計画停電対策のため、システム停止をさせる必要があるが、計画停電によって電車が止まり、SEが、計画停電前に行う予定のシステム停止作業が間に合わずに、データを消失した事例も発生している。
 - 神奈川県庁のデータセンターは震度5強の耐震設計であったが、ほとんどのサーバが倒れ、住民基本台帳データが壊れた。一般的にハードディスクは250ガルで壊れる、とされている。
 - 被災したシステムの復旧作業においては、CE、SEの順序でバトンタッチして作業を行うが、現在、SEが福島県入りを拒む状況が発生している。
- B氏：
- 3月11日に発災し、14日には現地入りした。
 - 発災直後気象庁の発表はM8であり、センター関係者は、釜石には湾口防波堤などがあるため、ある程度の安心感を持っていたものの、津波が防潮堤を超えて集落を襲う様を見て唖然とした。その後、米国地質調査所からM9の発表があり、その巨大さに皆驚いた。
 - 福島県の原因問題に対するマスコミ対応は、若い職員一人に任せきりであって、好ましいマスコミ対応とは思えなかった。
 - 政府のガソリン不足対応が遅かった。ガソリン不足のため、道路は空いていた。
 - 被災者の食事は、発災から3日間は備蓄食料で十分な量の食事ができていたが、4日目以降から食事回数が減った。一行の食事は、被災地では、持参の飲食物の食事しかできなかった。山形へ戻ると、飲食店は営業をしていない中、居酒屋だけが営業をしていた。

- 和歌山県:
- 和歌山県は関西広域連合の一員として、岩手県への援助を担当している。岩手県では、物資の配送作業を行ったが、時間経過と共に、住民の方のニーズが変化し、ブランド指定の物品などに変化している。
 - 5月から、住民サービスを行う市町村業務の援助に入る予定。
 - 県内では、住民が津波の避難指示に従わなかった問題点、また、現在の防災タワーの高さが適正か、など、今回の震災を契機に、減災のための見直しを行って行くつもりである。
- C氏:
- 兵庫県のボランティアセンターの仕立てたバス4台(70名)+舞子高校バス1台(20名)で宮城県石巻市へ入った。宿舎である仙台市秋保温泉のホテルは、他の救援隊の宿舎にもなっていたが、朝食おにぎりのみ。我々ボランティアの作業は、小学校の校庭の泥とガレキの撤去であり、自衛隊の重機が行えない部分を行った。トイレはバス内のもを使用した。4/7日夜M7.1の強い余震に遭遇したが、直後の約1時間は、携帯が繋がらなかったが、Twitter、Facebookは繋がった。
 - 支援に入った小学校では、発災後、子供を帰さず、小学校で避難民と合流した、とのこと。
- D氏:
- ボランティアとして、2回宮城県に入った。1回目は兵庫県社会福祉協議会で運行したバス2台80名募集の一員として。2回目は企業ボランティア隊としてバス1台(約30名)で東松島市へ入った。1回目の現地入りでは、ガソリンが不足しており給油待ちの長い列ができ、スタンドによっては既に3日先までの給油券を発効するなど油不足が深刻な状態。ガソリン不足のためか、道路はすいていた。
 - 2回目の現地入りでは、油不足が解消されおり、その分道路が大渋滞で、救急車や自衛隊の車も渋滞に巻き込まれていた。
 - ニュースで放送されている地域のうち津波に襲われたが建屋が残った地域では、家屋の1階はヘドロで埋まり、2階で生活をしている状態。まだまだ、被災したその日のままのところが多い。人手がまったく足りていない。
 - 渋滞によって、時間とガソリンのロスが多いため、行政がボランティアバスなどを用意し、ロスを省けるようにしてほしい。会社にはボランティア休暇制度がある。
- E氏:
- 東北・北関東地域には多くのグループ会社があり、被災をしていますが、一部を除き、生産の再開にこぎつけている。幸い、社員の犠牲者は無かったが、家族の犠牲はあった。生産設備の移動、壁のヒビ割れ、天井の落下などあり。
 - 反省点として、被災地に備蓄食料を送ったが、3日分の備蓄が必要との行政の指導に対して、実際は、置き場所や費用の問題もあり、1日分程度の備蓄しかなかったことなどがある。
- F氏:
- 東北地域には、沢山のグループ会社がある。社員は無事だったが、家族が犠牲になっている。工場は、大きな損傷は無かった。今後は、原材料の調達(サプライチェーンの維持)等が問題となる。
- 座長:
- 建築家は天井の強度をあまり考えて来なかったが、天井が落下すると、逃げ場を失うため、今後は考慮する必要があると思う。
- G氏:
- 地震、津波被害は悲しいことではあるが終わってしまった事である。原発問題は現在進行形である故、現時点では、最重要課題であると思う。原発問題は、日本一国に止まらず、世界や地球の問題であるにもかかわらず、政府を初めとして、そのような動き方ができていないのは、誠に残念である。
- 座長:
- 原発問題に関しては、皆、F氏と同感であると思うが、原発に関しては、残念ながら、情報不足、知識不足であり、動き方がわからない状況である。
 - 今後の津波対策が様々に議論されているが、これまでの津波被害の繰り返しにならないよう、進歩ある対策を期待したいところである。

次回会合

5月18日(水) 大林組

支部会 (座長:日下様(仮)、書記:角様)

勉強会 (座長:山口様、書記:大館様、発表者:紅谷様、小友様)

以上